

プロローグ

英語教育では4技能（話す、聞く、読む、書く）の習得については何時代の時代でも議論の対象になっている。時代により受信型の「読む、聞く」が重視される時代がある一方、昨今のようにインターネットの時代を迎えると単に「話す」力だけではなく、「書く」力も重視され、発信する力が必要になって来る。こうした背景を受けて文部科学省でも英語教育の見直しや大学選抜試験の見直しが急ピッチで進んでいる。

「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の在り方

特に英語については、4技能を総合的に評価できる問題の出題（例えば記述式問題など）や民間の資格・検定試験の活用により、「聞く」「読む」だけではなく「話す」「書く」も含めた英語の能力をバランスよく評価する。⁽¹⁾

本稿では現段階での大学教育における英語教育について、筆者が担当する2大学でのいわゆる語学授業における実践例を中心に、特に「読む、書く」の技能の指導法を中心に取り上げたい。

1 担当科目と教材

ここ数年担当している科目はおもにReadingを中心にするものと、Writingを中心にする科目である。学年は1年次必修科目、2年次必修科目、2年次選択科目である。必修科目や選択科目では履修する学生の意識も大きく異なる。

当初、英語を専門としない学科の語学担当の大学教員として採用された頃は市販の教科書を90分取り扱う授業であったが、筆者自身の授業展

開能力不足などもあり、90分間充実した授業を展開していたかは定かではない。そのため、途中、教材に関する内容を細くする話が入り、いわゆる「脱線」しながら授業を行っていた。教員も学生も機械ではないため、単調に90分の授業をすればダレや停滞ムードも漂う。よく学生が授業を聞いていないといったことは教員間でも話題に上る。しかし、自身が学生の頃のことを思い返せば、必修授業だから授業をよく聴くということではなかった。ここには学生に興味・関心を持たせられるかどうか、どこか緊張感のある授業ができるかどうかは、やはり授業担当者の力量が大きいのではないかと思える。筆者自身30数年懸けて辿りついた教授方法が分割方式の授業となった。これは主として高等学校の授業が50分前後で実施されていることから、メインとなる教材、補助教材、クイズ的なものを入れ、学生の集中力が続かなくなった場合には、一度リセットする意味合いを持ち、違った雰囲気やレベルの異なる内容に取り組むというものだ。当然学生にもレベルの差があるため、学生も活躍できる時間帯が変わってくることになる。

教科書は市販のものと補助教材、さらに語彙増強用のクイズと90分で3つの内容を取り扱っている。主な時間配分は教科書を45～50分、補助教材を25～30分、クイズに10～20分である。

語学授業では特に準備学習（予習）はかなり重要になってくる。通常授業は15回開講し、その上で試験を実施することになる。さらに、講義形式の授業と異なり、語学の授業では小テストや学生の活動などが頻繁に行われるようになる。

（1）教科書

教科書は到達目標や準備学習の観点からも重要な教材である。取り扱う内容もさることながら、そのレベルなども15回の授業を展開させていくには教科書の存在は大きい。さらに、通常は学生に購入させる場合が多く発生するため、15回と言う授業回数の内容、教科書の価格も考慮する必要がある。個人差はあるにしても一人年間約15～25科目程度は

履修することになり、そのうちの半分が教科書を指定すれば 7～13 科目の教科書を購入することになる。1 冊 1500 円～2500 円とすれば、10,500 円～32,500 円の負担となる。大学ではこうした学生の負担に配慮して、教科書を指定する場合の上限の目安を設けている場合が多い。学生にしてみれば、80 頁程度の教科書を買ったのに実際の授業では 20 頁前後しか扱わないとなれば、不平不満の対象となる。科目担当者はこうしたことにも配慮して教科書を選定しなければならない。また、レベル設定が合わないと、「易し過ぎる」、「難し過ぎる」といったことも生じてしまう。大学の授業であるから内容が難しいのはよいとして、これも度を越えてしまえば論外である。

教科書選びでさらに重要なことは、予習のしやすい形式になっているか、また、ある程度の時間で完結するような形式となっているかどうかだ。私見では 40～50 分で見開き頁の教材が完結できるようなものが望ましいと考えている。問題などもそこに設定されていることが望ましい。もちろん、90 分すべてを教科書に取り組むことが望ましいと思えるが、30 年近く語学の授業を担当していて最も感じることは、学生の集中力である。以前、TOEIC の教材をメインとする授業を担当したことがあった。学生もこうした検定試験の受験や資格の取得を目指している比較的意識が高い学生がいる一方で、そうでない学生がいる授業では、リスニングも 30 分以上行くと却って逆効果となってしまうことがある。その結果辿りついたのが授業内容の分割システムである。もちろん、学生のリアクションを見ながら、臨機応変に時間の調整を行っている。

(2) 補助教材

補助教材は教員側が用意して学生の経済的な負担とさせないものだ。その分、補助教材を作成するのは時間と労力がかかる。筆者がこの補助教材を作成している留意点は以下の通りである。

- ・教科書に出てくる単語や表現、内容とリンクしているものをと

どころに入れ込んでいく。これによって学生が繰り返し、同じ表現等を目にすることで、理解度を増していくこと。

・授業中の学生の活動を多くするために有用な内容のものを準備する。英語表現では必ずしも1問1答にこだわらないものがよい。特に英作文的なものについては、学生からの質問や発言がしやすいようなものを用意する。

・学科等の特性が生かせる内容のものを用意する。

・達成感を重視し、薄いものを用意する。複数冊扱い、ここでレベルの調整を行う。

・遊び的な要素も時々加える。英語のクロスワードパズルなどもその一例である。

(3) デジタルフラッシュ (教育機材を含む)

デジタルフラッシュはすでに市販もされているようだが、筆者はこうしたものが市販される以前からこのように命名し、自身の教材研究として取り組んで来た。もともとは中学校のフラッシュカードをデジタル化し、さらに発展させてもので、以前は単純に写真のスライドショーとして実施していたが、最近はパワーポイントとjpeg、pdfデータなどを組み合わせ作成している。

これはフラッシュカードをパワーポイントのスライドショーを利用して、クイズ形式で進めるものだ。これを「デジタルフラッシュ」と命名し、イラストや写真などが活用して進めている。活字だけで進めるよりも、視覚的なものを活用することで、単調さが防止できる。学生から寄せられたものとして、「知っているようで知らないもの」、「わかりそうでわからないもの」といったようなことを扱ったことにインパクトがあったようだ。(2)

当初は、授業終盤の10～15分程度のところで、教科書や補助教材の問題

を解答していくことでかなり単調感があつた。思いつきからはじめたことであつたが、15年以上も続け、学生の授業アンケートなどからも好評であつたことからこれも定番として授業の中に組み入れて現在実施している。基本は中学英語のフラッシュカード方式であるが、これをさらにバージョンアップしたものである。その利点は以下の通りである。

- 1 同じ内容のものをプリントで配布することも可能であるが、プロジェクターやディスプレイに映し出すだけでもかなり違った印象となる。単調さがなくなってくる。



大学A 教室常設AV機器完備



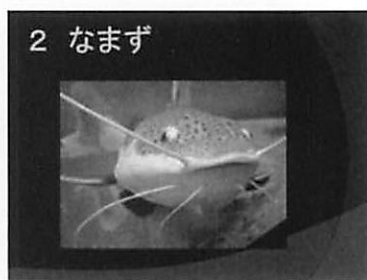
大学B 携帯用持込機材

- 2 文字情報だけでなく、写真・イラストなども活用でき、視覚情報があるため、クイズ的な雰囲気を出せる。
- 3 取り扱い内容もテーマを決めて、10題から20題ぐらいを設定し、わからない場合には辞書等を活用してよいとの条件で行うと、予想を越えて、学生が熱心に取り組んでいる。
- 4 全体の30%~50%は当然知っているだろうというものを取り上げる。この中に教科書や補助教材で扱った単語をうまく挿入したり、相関関係のある単語なども意識的に加えていく。授業の1~3回程度までは比較的難易度の低い生活英語の内容を組み入れて行っていく。

写真等を利用したもので学生が一番印象に残ったものは以下の通りであった。(3) 提示されたものを英語に直すというクイズだ。テーマは「関連して覚える」で1～4として以下のようなものを示した。



answer cat



answer catfish



answer porcupine



answer porcupine fish

わからない場合には辞書を使用してよいという前提で行っているが、学生の中にはヤマアラシをmountain stormと答える珍答も出てくる。時間があれば、心理学でおなじみのベラックの「ヤマアラシ・ジレンマ」について触れることがある。また、ハリセンボンは今現在、人気お笑い芸人で同名のコンビもいることから、妙なインパクトがある。これ以外にも学生から印象に残ったものとして回答があったものは以下のものが多かった。

ゼリー → jelly

クラゲ → jellyfish

ハエ → fly

トンボ → dragonfly

ホタル → firefly カゲロウ → mayfly
 あらいぐま → raccoon たぬき → raccoon dog

ここでも単純に「カゲロウ」を辞書で調べて「陽炎」の英語、heat hazeで回答する事例もあった。学生の授業アンケートのコメントを見ると「知っているようで知らない」ものが提供されたことが一番興味深かったようだ。健康・体調で使用される「咳」(cough)、「熱」(fever)、「喉の痛み」(sore throat)は比較的知られているが、「鼻水」(runny nose)、「くしゃみ」(sneeze)は知らない学生が多かった。大学生ということから、一語一義といった考え方に囚われないようにするために以下のような単語の出題をしたこともある。経営学部や法学部の学生を対象にする場合には刺激的であったようだ。

right	正しい	→	権利
book	本	→	予約する
pension	ペンション (宿泊施設)	→	年金
interest	興味	→	利子
stock	在庫	→	株
party	パーティ、宴会	→	政党
article	記事、論文	→	条 (法律等)
case	場合	→	訴訟
trial	試す、試験	→	裁判、審理

また、省略語では以下のものも提示したことがある。

GDP	Gross Domestic Product	国内総生産
GNP	Gross National Product	国民総生産
GNH	Gross National Happiness	国民幸福度
GNC	Gross National Cool	国民魅力度 (文化外交)

すでに高校英語で学んだものもあるが、全学生がそれを覚えているわけではないため、思った以上に学生の反応があった。新しい単語の場合には、まだ、紙辞書・電子辞書の見出し語になっていないものもあり、この場合にはインターネットでの検索が必要となる。特にGNCは2002年に誕生した言葉であるが、いまや「クール・ジャパン」を聞いたことがないということもないため、その原点となっている用語を提示することは大学の授業としては当然成立するものと考えている。これ以外にはアニメをはじめとしたポップカルチャーを利用したものもある。⁽⁴⁾

語彙については中学校・高等学校での検定教科書の影響が大きいと言わなければならない。単語を知識として丸暗記していくのではなく、興味・関心を喚起できるかどうか大きな鍵となるため、クイズ形式とした。初めは「ネコ」を英語に直すところを質問すれば、当然大学生としては心外であろうが、「ナマズ」を出すと、途端に辞書で調べ始め、学生の間にごわつきがある。続いて「ヤマアラシ」、「ハリセンボン」へと続けると学生の関心度が急に高まり、集中度が増してくる。事例を工夫すれば、小学生から大学生、さらには英語科教員向けの教員免許更新講習の教材研究の事例としても十分に通用するものとなる。

デジタルフラッシュのフィードバック（答え合わせ）は学生がどのように解答したかを確認し、次の授業の冒頭で必要に応じて実施している。「ヤマアラシ」をmountain storm、「カゲロウ」をheat hazeなどはその例である。また、日本料理編では「のり」「昆布」「わかめ」が学生にとってすっきりしない状態で解答している。正答率は辞書を活用している分、高いのだが、学生の様子を見ていると納得感があまりないように見受けられる。そのため、このような場合には次回に回さず、何故、sea weed「海の雑草」なのかを説明することとなる。文化の違いがここで明らかとなる。また、日本語が英語になっているものもあるため、こうしたものについても必要に応じて説明することが重要ではないかと考えている。こうした内容は学問体系から言えば、英語の語彙研究の形

形態論ということになる。英語教員が英語学を専門に学び、形態論に詳しいとしても実際の授業でそれが生かせなければ単なる自己研鑽で終わってしまう。学生に形態論に関する授業をしても理解すること困難であろう。こうした内容を実際の授業でどう生かしていくかは教員の教材研究力によるところだ。

2 英語指導の方法

(1) Readingの場合

Readingの授業と言えば、「読解」と思われがちであるが、筆者は「読解+読み」、すなわちRead Aloudも重視している。いわゆる「読解」では前述のデジタルフラッシュの教室の写真でも示したが、ディスプレイとグリーンボードへの投影が利用できるため、当初から予定している解説部分等はあらかじめデータを用意し、学生に示せるようにしている。「読解」もいわゆる全和訳とせず、要点をつかむことを主としている。ここで学生が要訳をする上での3つの課題点を列挙しておきたい。

- 1 単語の意味が分からない場合。予習を十分にしていないために起こる場合と辞書から状況にあった意味を推測することができない。
- 2 単語の意味は分かるが、英文を把握できない場合。第1は熟語等になっている場合にはいくら単語単体の意味がわかっている、英文を把握することはできない。予習段階での準備不足もあろうが、熟語であることに気が付かない、または、熟語として辞書で探ることができない場合がある。第2は英文の構造が分からない場合である。このような場合には英文法の理解が大きな鍵を握っている。
- 3 語彙についての不安や文の構造についてもよく理解しているが要訳ができない場合。母語による「まとめる力」、「文章把握力」が十分でない場合がある。

上記の1及び2については学生が使用している英語辞典にも大きな問題

があると考えている。英語辞典に問題がある場合と活用の仕方が不十分な場合の2つの問題が存在している。⁽⁵⁾ 2015年度と2016年で400人程度の学生が履修しているが、過去2年間で紙辞書を使用している学生は皆無であった。それ以前では年に1～3人程度紙辞書を使用している学生がいたが、昨年からは紙辞書の利用者がいなくなった。クラスによっても差があるが、電子辞書を利用している学生は全体の約60%、タブレット端末・スマートフォンを使用している学生は約40%である。タブレット端末使用者には英語辞典をアプリとしてダウンロードしているものも含まれる。最も単純にスマートフォンの内臓辞典だけを利用しようとする学生もいるが、結局これで済まないことが多い。単語自体が載っていない、また、熟語等が載っていない、探せないといった事態が生じる。学生に対してはシラバスで紙辞書また電子辞書の利用を推奨し、スマートフォン内臓の辞書では対応できないことは明示しているが、第1回の授業時に使用辞書の確認を行っている。最近はこの大学でも無線ランが使用できるため、無料で使用できるON LINE辞書の紹介も行っている。これにより、例文不足のスマートフォンの内臓辞典の弱点を補うことになるが、ON LINE辞書の利用は時間がかかるため、授業のスピードが落ちるといふデメリットも大きい。

単語の意味については語彙力があればある程度解消される。「読解」を中心とする授業で最も困難なのは英文の構造を理解するための英文法の理解度である。基本的な英文を読むための英文法はほとんど高校3年生までのもので対応できる。しかし、実際にはいざ英文の読解をさせると言うようにはかどらない。難しい内容の英文や難しい英単語に気を執られていると、it is ...for ... to..., it is A that....といった英文のものでさえも、途端に訳せなることがある。しかし、ヒントとして、こうした構文があることを示せば、ほとんどの大学生は読解的には問題なく、英文を訳すことができる。予習が充分であれば、こうしたこと気づきを喚起するヒントは必要ないが、現実的にはヒントは適度に示さざるを得ないことがよくある。実際の授業では、学生が覗いた時にディスプレイや

グリーンボードに投影することで、学生は新しい情報を得て、英文の理解を高めることができる。

「読み」(Read Aloud)の指導では3つのポイントがある。第1は各単語の発音の問題である。第2は単語を一つずつ読んでしまい、発音もフラットになり、リズム感のない読みとなってしまう。ひどい場合には英語ではなく、日本語のカタカナを読んでいるような発音になる。特にrとlの区別だけではなく、曖昧母音などもほとんど意識していないようだ。これについては特に高等学校での英語の授業でほとんど読みの練習(Read Aloud)がされていないことがあり、学生を一概に責められない状態である。単語と単語をひとつずつ読むのではなく、場合にはlinkingさせることなどを意識させることや、同じ発音をする単語とその箇所を簡単な単語で示すことで学生のRead Aloud時の意識を高める指導を行っている。学生に英語の音声学、音韻論を理論として教えるのではなく、実際の英語の発音時に触れることで、その意識を高めさせることが重要である。また英語特有のsilent wordも厄介だ。

on a box, in a room, boy and girl, one of them
girl, turn, world, curl
know, knife, knight, knee, knit, knock, knob
climb, tomb, comb, knob

語彙の難易度からいえば、かなりやさしい単語である。know, knifeの発音を大きく間違え、kを発音する学生はいないがkneeあたりになると、怪しくなってくる。単語の発音に自信がないとリズム感がなくなる。おおよそ大学に入ってから初めて見る英単語というのはよほどの専門書でない限り、そうあるものではないだろう。しかし、学生が単語を覚えていなければ、発音等が怪しくなることは当然のことである。中学ではRepeat after me.がかなり頻繁に行われていただろうが、高校になるとどうもこうしたことがなくなって来る傾向がある。ほとんど読まされた

ことがないという学生もいたくらいである。今後こうしたことについても学生へのアンケート調査を実施し、高校時代の英語授業の実態を知ること大学における英語教育では重要である。大学は学生を引き受けた以上、その背景にかかわらず、ある一定の成果を出す必要があるからだ。

第3の場合は英文のポーズの取り方である。これには意味の切れ目が重要である。従って、Read aloudであるが、読解力も必要となる。そこでReadingの指導では読解を行う英文とRead aloudを行う英文を分けて用意して指導することとした。限られた授業時間の中で指導を行うためには、読解を中心に行う英文とRead aloudを行う英文が同じである必要性がないと判断したためだ。Read aloud用の英文はレベルを下げて、比較的簡単な内容のものを選び、内容を理解することよりも読むことに集中させることに主眼を置いた。あらかじめ、Read aloudする際の注意点を確認し、Model Readingをした後、学生にもReadingさせていくこととした。限られた時間で学生の活動を多くし、Read aloudに慣れることで、いわゆるSpeakingにも連動して、発話すること自体への不安やストレス解消につながることを期待している。

(2) Writingの場合

Writingでは、例文が多く載っている辞書を活用することが一番重要である。また、学生に活動させるために、解答をグリーンボードやホワイトボードに書かせ、その際の添削は各ボードで行うが、正しい英文はディスプレイとグリーンボードへの投影で示すこととしている。これにより、添削の内容と解答を同時に見ることが可能だ。現在は電子黒板もあるが、大学の設備として電子黒板を整備しているところは決して多くなく、現実的な対応として実施している。学生からの授業アンケートでもこうした教育機材の活用については役に立っていると備考欄への書き込みもされている。

Readingの「読解」と同様に辞書の問題は侮れないものがある。特にWritingの場合には例文を活用することが重要であるため、単語だけを

掲載している辞書はほとんど役に立たない。Writingの指導で筆者自身が最も痛感させられるのは2つある。

第1は母語の理解度が外国語に大きく影響しているということだ。これは語彙力のみならず、文章全体に係る問題である。第2に指導上、こだわる点を「主部と述部」あるいは中心になる主語及び動詞としているが、主語が確定できないことがある。また、定番となる文型や構文が思いつかないといった事態がよくおこる。パターンプラクティスをしている最中はよいが、これから離れ、異なったパターンプラクティスを行ったのちに、また戻った時に対応が十分にできなく学生がいることだ。学生の理解度もあるが、このあたりの指導が難しい。これらの基礎ができて初めて、いわゆるAcademic Writingが実践できる。観光内容の英文エッセイを課題として提出することが前提としてあり、そのため、観光に関する教科書を選定して、授業で使用した。実際の授業で学生がどのような英文を書いたかを示してみたい。(下線筆者)

Unit 10 NIKKO: THE TOSHOGU SHRINE ⁽⁶⁾

- ・本文中の参考文例

They have been registered as national treasures or important cultural assets.

- ・英作の問題A

日光には国宝や重要文化財に指定されている美術品がたくさんある。

「～指定された」 designated as 「美術品」 works of art, art object

学生A We have many works of art designated as national treasures or important cultural assets in Nikko.

学生B There are a lot of art objects designated as national treasures or important cultural assets in Nikko.

ネット翻訳 There are a lot of artworks appointed to a national treasure and an important cultural property in sunlight. ⁽⁷⁾

解答例 There are many works of art designated as national

treasures or important cultural assets in Nikko.

分析 「主語と動詞」に拘ったため、あえて「日光」を主語としない英文を考えるように指示を出したこともあり、学生A及び学生Bに類似した解答が多かった。There are構文を活用した学生が多かった。今回事例を挙げる前のUnitのところで、There are構文での英作文の問題があった。ネット翻訳では「日光」を“sunlight”としていることもあり、この英文を流石に利用した学生はいなかった。ちなみに、授業後にNikko has many works of art～の英文はどうかと質問をしてくる学生はいた。

Unit 12 KAMAKURA: DAIBTSU ⁽⁸⁾

・本文中の参考文例

It used to be enshrined in an impressive wooden building, which was damaged by storms and later carried away by a tidal wave toward the end of the 15th century.

・英作の問題B

大仏が安置された大寺院は津波に押し流れてしまった。

学生A The Daibutsu in the great temple was carried away by a tidal wave.

学生B The great temple which enshrined the Great Image of Buddha was carried away by a tidal wave.

ネット翻訳 I pushed the large temple where a great statue of Buddha was enshrined for a tsunami and have played. ⁽⁹⁾

解答例 The great temple building which enshrined the Daibutsu was carried away by a tidal wave.

分析 大きな主語を取り違えている典型的な例である。「大仏が流された」のではなく、「大寺院が流された」として英作したのが学生Aの事例である。内容が複雑になると、こうした事例はよく見られる。日本語の「は」「が」の使い方を母語とは言え、あいまいな理

解をしている場合も見受けられる。「は」は主題を表すことから、事例として「象は鼻が長い」を示し、学生に説明した。ネット翻訳は主語がIとなっていることで、まったく意味をなさない。解答例に **building** が使用されていることについては、建物が流されたが、その中に安置されている大仏がそのままその場にあることから、文字通り「大寺院が流された」とすると、寺院すべてが流されたということになるため、建物と大仏をはっきり分けて表現したことを解説した。なお、津波はラフカディオ・ハーンにより“tsunami”が英語となっていることも紹介した。⁽¹⁰⁾

Unit 14 MT. FUJI ⁽¹¹⁾

- ・本文中の参考文例なし
- ・英作の問題C

日本には活火山が多くあり、火山列島と呼ばれることがよくある。

「活火山」 active volcanoes 「火山列島」 a volcanic archipelago

→ 学生に次のような日本語も提示した

日本には活火山がとてもたくさんあるので、日本は火山列島と呼ばれることがしばしばある。

学生A Japan has many active volcanoes, so it is often called a volcanic archipelago.

学生B There are so many active volcanoes in Japan that it is often called a volcanic archipelago.

ネット翻訳 There are many active volcanoes in Japan and is often called volcanic islands. ⁽¹²⁾

解答例 There are so many active volcanoes in Japan that it is often called a volcanic archipelago.

分析 Unit 10の事例を先に授業として実施しているため、大きな混乱はなかった。学生Aはヒントとして示した日本文ではなく、英作の問題Cで英作。学生Bはヒントを活用した事例である。英作の考

え方として、逐語英作とするか、内容を相手に伝えるかは重要な考え方である。授業の方針は後者である。教科書には本文中にa dormant volcano「休眠火山」、ash「灰」、lava「溶岩」なども示されている。ネット翻訳では「列島」をislandsとしているが、少ない語彙数で表現するとすれば、十分に可能な表現であろう。

Writingの授業では同じ英作文に対して、複数の学生に対してホワイトボードやグリーンボードに解答を書いてもらうことが多い。まったく同じ英文の場合もあれば、まったく異なる構文や文型の場合もある。このような場合には学生にどうしてこのような英作となったのかを説明してもらい、その後筆者がさらにコメント等を加えるようにしている。学生が前に出て書いた英文に赤や青で添削をするとどれが解答の英文になるかわかりづらくなるため、模範解答はディスプレイやプロジェクターで投影している。ネット翻訳を示したのは授業の第1回目に無料で活用できるインターネット辞書、weblio辞書を紹介しているためである。⁽¹³⁾ オンラインで収録語数が日々変化しているが、1000万語前後である。英和辞典、和英辞典、英語表現、英語翻訳等の機能がある。英作文の日本語文をそのまま英語翻訳した場合の解答も記載した。学生の中にはこうしたネット翻訳が正しいと信じている者も少なくなく、身近な文章、慣用語句はともかく、あらかじめ参考にはなってもそのまま使用することはほとんどできないことは提示している。

(3) Grammarの重要性

白畑(2015)は英文法の指導について次のよう述べている。

「英文法を知らない」という表現には2つの含意がある。1つ目は当該の英文法について、頭の中に知識として持っているが、実際の使用場面では間違えてしまう、という意味である。2つ目は、その文法項目についての知識そのものが欠如している、と言う意味で

ある。(14)

筆者は前者の1つ目についてさらに2つに分類できると考えている。第1はこれまで習ったことがかなりうる覚えで、十分に理解していない、身に付いていない場合である。このような場合には授業で何回かこうしたことに遭遇すると、だんだんと記憶が戻ってきて理解として定着する場合である。第2は文法事項の名前だけを覚えていて、中身自体は全く覚えていない場合である。こうなると知識そのものが欠如しているのと変わらない場合がある。綾乃(2015)も次のように述べている。(15)

文教政策によりグローバル人材育成が推し進められ、多くの大学で英語教育の見直しが行われています。さらに、学生の留学を競って推奨しており、一部の大学では必修化される、といった昨今の大学を取り巻く状況がある一方で、大学一年生を対象とした必修英語の授業を担当すると、中学校の段階で習得しておくべき、関係代名詞を含む関係節の文法が分からない、また、Wh疑問文に関する文法すら定着していない者が一定数いることが分かります。例えば、(1a)の主節の‘do’は主語‘you’との位置交替をするが、埋め込み節内の‘will’は、主語の‘John’とは位置交替しないことや、(1b)の‘what flower’の‘flower’が‘what’と共に文頭に現れる必要があることを理解していない、さらには(1c)が示す様に、直接疑問文であるにも拘わらず、疑問詞‘what’が、間接疑問文同様に‘think’の直後にも現れても構わないと思っている等々、枚挙にいとまがありません。(以下、文法、問題がある文には、文頭に*を付します。)

(1) a. *Who do you think will John meet at the conference?

⇒OK Who do you think John will meet at the conference?

b. *What do you like flower?

⇒OK What flower do you like?

c. *What do you think what John ate? ¹

⇒OK What do you think John ate?

学生はすでに習っていても、わからないことは「忘れた」ではなく、「習っていない」と言う場合が圧倒的に多いからだ。教員なら誰しも経験するであろうが、順を追って説明すると、学生も「そういえば、、、習ったけど忘れた」ということは散見される。学生にとってそれが頭の中になれば「忘れた=習っていない」ことになり、結果的には「わからない」となる図式になる。実際にあった例で極端なものとしては「受動態」はわからないが、「受身」ならわかるという現象もあった。重要なことは白畑(2015)も述べているが、大学でも学生には明示的に英文法を教えるということだろう。

- (1) 自分の知っていること、知らないこと、使用できること、知っていても使用できないことなど、英文法規則を再確認させ、新たな「気づき」を促すこと
- (2) これまでに未知であった、または曖昧であった文法事項を、これから学習できること。⁽¹⁶⁾

読解を行う場合のReading, Writingの場合にはこのGrammarの振り返りはかなり有効である。英文エッセイの課題で提出された英文をみると、かなり英文を使いこなしているが、三単現のsの脱落、単数・複数数の区別まで行き届いていない場合が多い。指導として当然誤り訂正をしていくが、英文が長くなればなるほど、こうしたことはなかなか訂正が出来なくなってくる。これには学生が提出する前に再チェックするという行為が不足していることが大きな原因であるが、長い英文を書くことや単調な英文を書かないように気を使えば使うほど、初歩的なところでミスが出てしまう現象がある。こうした傾向が見られたため、フィードバックとして次のような方法をとった。

- (1) **corrective feedback**として、全体的な同じような傾向な誤りについては全員に対し、事例を示しながら、フィードバックした。
- (2) 個々に課題を返却する際には、すべてに**corrective feedback**が行なえなかったため、誤りの箇所に下線を施し、「三単現に注意」「先行詞に注意」「助動詞の後ろは動詞の原形」といった指示を書いた。

筆者はこれまで中高の英語科教員の経験があるため、実際に中学1年生から高校3年生までの授業を担当していたこと、現在も教職課程で教法を担当していることから中高の教科書に触れているため、どの段階でどんな文法事項が扱われているかをある程度把握できるため、この点は大学生の指導でも、どのあたりの文法事項までが学生が理解できるかの目安になっている。もちろん、検定教科書の種類により扱われている文法事項の順番等が若干異なるが、学生の英語力を理解する上では有益である。

本務校で英語教育に関する会議があったとき、ネイティブの専任教員より日本人英語科教員に対して、授業内容として**Grammar**を扱って欲しいとの要望があったのは、むしろネイティブ教員から要請があった。英語コミュニケーションの強化と言う意味合いから本務校では教育課程にはかなり会話系(**Speaking**)の科目が必修科目として配置された。学部1・2年生に対して6科目が必修科目として追加され、英語の必修科目は合計で10科目となった。その内訳は以下の通りである。

English Reading	1年次前期
Oral English	1年次前期
English Communication Skills 1	1年次前期
English Writing	1年次後期
Advanced Oral English	1年次後期
English Communication Skills 2	1年次後期

English Communication Skills 3	2年次前期
English Communication Skills 5	2年次前期
English Communication Skills 4	2年次後期
English Communication Skills 6	2年次後期

上記以外に選択科目で1年次より英語の選択科目が取れることになっている。2・3年配当科目でEnglish Grammarも配置しているが、当然のことながら、English Reading, English Writingでは日本人教員が担当し、Grammarが扱われることになる。大学全体の考え方は会話系の科目を出来るだけ多く設置する方向にあるが、現場教員は学生の現状を考えて、Grammarの必要性を感じているのだ。英語科の会議等では、学生がもう少し文の構造を理解しないと英語表現が上達しないと指摘があった。学生全体がある程度文法的なことが抑えられていればネイティブ教員からこうした要望はないであろうが、実際には会話以前に基礎的な振り返りが必要であると感じたということだ。会話系の授業ではパターンプラクティスがかなり行われるが、Grammar的な内容全てをこの練習によりマスターするわけにもいかないのである。文の構造を理解することは、Reading, Writingだけではなく、Speakingにおいても英語を理解する上で必要であるのだ。

(4) 辞書の活用

Reading、特に「読解」及びWritingの指導では学生に辞書を如何に活用させることができるかが、重要な要素である。英語が苦手、わからないという学生の多くは辞書すら用意しない学生が多い傾向にある。電子辞書でさえ持参せず、手元にあるスマートフォンで済ませようとしている場合が多い。その場しのぎの活用である。こうした学生への対応をどのようにするかが教員として試されるどころだ。対応として最も有効なものは、スマートフォン内臓の英語辞典に記載されていない単語、熟語や短い慣用句を意図的に出題することだ。これもかなり労力がかかる。

まずはスマートフォン内蔵の英語辞典から online 辞書に移行させることが先決だと考えている。online 辞書では検索に時間がかかるため、問題数が増えてくると実に手間がかかる。デメリットはあるが、学生が「調べよう」という気持ちが起きることがここでは重要ではないかと考えている。

英作などではonline辞書の翻訳機能を活用しても明らかにおかしい思える翻訳が出てくるものを活用するのも一つの方法だと思える。結局は辞書に当たることが一番良いと思わせることである。しかし、高校時代にすでにこうした習慣から離れた学生に大学入学後にこうした負荷をかけてもすぐに効果が出てくるわけではない。最終的にはTPOに応じて使い分けができるようになることが望ましいだろう。単に語彙だけを知るだけなら、スマートフォン内蔵辞書でもよいかもしいない。紙辞書で言えば、ポット版形式の英和辞典のようなものだ。ネットの活用により多くの例文に触れる機会が増えている分、Writingに関する意識は高くなっている。

エピローグ

大学における英語教育の事例報告として、特にReading, Writingでの授業での実践について分析等を加えた。Readingについては読解よりもむしろRead Aloudに関しての取り組みを報告した。高校での英語の授業ではほとんどRead Aloudがされていないが、大学の授業でも状況は同様だ。会話系の授業があるため、まるで分業化のように発話の活動は英会話の授業、Native Speakerの授業ですればよいとの思い込みから学生の発音や読みについて取り組むことがなくなって来る傾向にある。90分の授業時間の中で、あるいは15回の授業の中でRead Aloudへの取り組みはしていかなければならない。読解用とRead Aloud用の教材を分けることで指導は可能になって来る。学生は英文＝英文解釈なり、「読む」意味を「読解」のみにしてしまっていることを改め、「発話」と同様にRead

Aloudを意識することが重要である。

Writingについては特に辞書の活用が重要である。手元にあるスマートフォンだけに固執する意識を変えさせることが重要であるが、今の時代ではFOMO⁽¹⁷⁾の問題もあり、なかなか厄介である。ネット上のonline辞書の活用も含め、例文を見る習慣をつけさせることが重要である。中学・高等学校での英語教育と大学の英語教育が全く別のものではなく、むしろ、中学・高等学校の英語の上に、さらにこれを使いこなす、いわゆる「使える英語」とすることが大学の英語教育の目的である以上、学生の活動を中心にした英語の授業展開が重要であると考えている。白畑(2015)も次のように述べている。

大学で英語を教える立場からすると、中高の先生方には意外に思われるかもしれない（逆に、首定されるかもしれない）が、現在の大学生の多くが英文法を知らない。これが現実である。英文法を知らなくても、現在行われている小学校外国語活動では問題はないが、大学レベルではコミュニケーション活動をする際に支障を来たす。話す中身が高度になっているからだ。⁽¹⁸⁾

同じように綾野(2015)も次のように述べている。

中高で学習した各種構文等に関する断片的な文法知識を再構築することにより、学習者が英語の文法知識全体を俯瞰できるような、体系的な学習英文法を構築する必要があると考えます。⁽¹⁹⁾

かなり前とはいえ筆者自身、中学校・高等学校での英語科教員として勤務経験があり、大学での英語教育（教職課程を含む）に携わる者として、中高での英語教育が検定教科書を中心に行われていること、また、大学入試の出題傾向を強く意識して、一種受験英語といったジャンルさえ存在するのは制度的に見ても、大学が無縁でいられるはずはない。

また、ReadingにしてもWritingにしても多くの学生が英語でつまづく原因のひとつに文の構造がわからないということがおきているのも事実である。because ofと接続詞becauseの区別が付かないといったことは、節、句の考え方が十分に理解されていないことを表している。従って、実際に大学に入学した学生に対する英語教育は中高の英語の上に新しいものを当然加えながらも、「定型」として覚えていたものを柔軟にかつ発展させていくことが求められているのではないだろうか。

注

- (1) 「入学者選抜改革における英語 4 技能の評価」
(<http://4skills.eiken.or.jp/education/innovation.html>)(2016 年 11 月 24 日アクセス)
- (2) 佐々木隆「幼児教育学科の英語教育」(『武蔵野教育研究』第 3 巻第 3 号、武蔵野教育研究会、2017 年 1 月), p.19.
- (3) デジタルフラッシュについては内容さえ工夫すれば、いろいろな学部学科で対応ができる。他の事例として「幼児教育学科の英語教育」でも日常生活で食している魚、すしネタとして定着している魚の名前などもクイズ形式で出題するとかなり有効であった。この時、写真で魚を示しても区別ができないため、あえて漢字で出題すると、漢字が読めない学生が多くいる。しかし、漢字に妙に強い学生が時々折り、こうした学生が脚光を浴びるなど、面白い現象が起こることがある。
- (4) 筆者がマンガやアニメを英語教材として活用した事例の発表については以下の通りである。(下記以外にも高校生を対象にした特別授業なども行っている)

活字化されたもの

「アニメを利用した英語教材研究」(『武蔵野英語教育研究』第 2 号、武蔵野英語教育研究会、2005 年 1 月)

「第 6 章 アニメを利用した英語教材研究」(『教職課程と英語教育』

イーコン、2006年5月)

「第10章 アニメを利用した英語教材研究」(『今後の教職課程と英語教育』イーコン、2007年5月)

「(1) マンガとアニメ」(『クール・ジャパン マンガ/アニメの現状と展望にいて』イーコン、2010年4月)

「第3章 マンガ/アニメを利用した英語教材研究」(『英語教育の行方』イーコン、2011年4月)

「3 オタクの定義」「3 ひきこもり」(『オタク文化論』イーコン、2012年1月)

「① マンガとアニメ」(『日本文化ブームと国際文化交流』多生堂、2012年4月)

「第5章 大学教員の社会貢献」(『大学教育の行方』武蔵野学院大学 佐々木隆研究室、2016年8月)

研究発表・講演等

「教材としての英米文学の行方」(日本英語文化学会、シンポジウム「大学における一般教養科目としての『英語』を考える」、2010年9月4日、於：駒澤大学)

「アニメ、スーパー戦隊シリーズからこんなことがわかる！」(子ども大学さやま 武蔵野学院大学・武蔵野短期大学、2014年1月18日)
(子ども大学さやま)

「ポップカルチャーとオタク文化」(入間市教育研究所 特別授業、2014年2月20日～21日、24日～25日)

「英語の教材研究事例～ポップカルチャーの活用：アニメ・マンガを中心に～」(日本英語文化学会第129回月例会、2014年12月13日、於：昭和女子大学)

「スーパー戦隊シリーズ、ドラゴンボール、ポケモン大集合！ マンガ・アニメでも勉強するぞ!？」(子ども大学さやま、武蔵野学院大学、2016年10月15日)

(5) 電子辞書とデジタル端末の利用については拙著「第6章 英語辞典

- の行方 電子辞書と i-Pad」(佐々木隆『英語教育の行方』イーコン、2011年4月)で論じた。
- (6) 古川友章、エドワール・マーゲル *A Shorter Course In English Sightseeing*. 南雲堂、2011年3月、p.18.
- なお、解答例については教授用資料のものをここでは引用した。
- (7) 「weblio 辞書 英語翻訳」<http://translate.weblio.jp/>
- (8) *A Shorter Course In English Sightseeing*, p.20.
- (9) 「weblio 辞書 英語翻訳」<http://translate.weblio.jp/>
- (10) 梅田紘子「小泉八雲と tsunami」(『日欧比較文化研究』第15号、2011年10月)を参照。
- (11) *A Shorter Course In English Sightseeing*, p.22.
- (12) 「weblio 辞書 英語翻訳」<http://translate.weblio.jp/>
- (13) 「weblio 辞書」については拙著「第6章 英語辞典の行方 電子辞書と i-Pad」の中の「オンライン辞典」(佐々木隆『英語教育の行方』)では取り上げなかった。
- (14) 白畑知彦『英語指導における効果的な誤り訂正』(大修館書店、2015年7月)、p.v.
- (15) *Ibid.*, p.ix.
- (16) 綾野誠紀「大学生を対象とした学習英文法のあり方について—理論言語学の観点からの一試案—」(長谷川信子編『日本の英語教育は今、そして、これから』開拓社、2015年3月)、pp.111-112.
- (17) 拙著「インターネットによるコミュニケーション」(『大学教育の行方』武蔵野学院大学佐々木隆研究室、2016年8月)、拙著「FOMO」(『ポップカルチャー論』多生堂、2016年12月)ですでに論じた。
- (18) 白畑知彦『英語指導における効果的な誤り訂正』, p.v.
- (19) 綾野誠紀「大学生を対象とした学習英文法のあり方について—理論言語学の観点からの一試案—」、p.113.

【キーワード】 英語教育、Reading、Read aloud、Writing、Grammar

執筆者一覧

佐々木 隆 武蔵野学院大学教授

武蔵野教育研究 第3巻第4号

2017年2月1日 発行

武蔵野教育研究会 編集・発行

〒350-1328

埼玉県狭山市広瀬台3丁目26番1号

武蔵野教育研究会事務局

武蔵野学院大学 佐々木隆研究室